メッセージへの回答に代えて

FF7 世界の宗教とセフィロス教の可能性について

ご意見聞かせてくださってありがとうございます。

ジョニーは「いただきます」をするんですか？　リメイクででしょうか。無印だとしたらすっかり記憶のかなたで、恥ずかしながらどういう描かれ方をしたのかわからないですが、いまふと思ったのは、ウータイ戦争後、ミッドガルでウータイブームみたいなのが起きていたら面白いということです。ウータイ文化が一気に流入してきて、ニューエイジ運動っぽいものを後押しし、星命学への回帰が起きアバランチができる。「いただきます」をすることが星の生命への敬意を示すという意味で、ちょっと意識高めでかっこいいみたいな感覚が若者たちのあいだにあったらとても面白いと思います。

メッセージを読んでいてふと気がついたんですが、星信仰と神信仰ってなかなか両立の難しい信仰体系ですね。ウータイの仏教的な宗教ではおそらく絶対者としての神は不在でしょうから、星信仰と矛盾なく展開できる気がしますが、超越的な神を立てたとき（セフィロスさんの言動からしておそらくそういう神概念があの世界にもあるのだと想定してよいと思いますが)、それは必然的に星の意志と対立せざるを得ない。妥協点があるとすれば、星の声が神の声であるとか、汎神論的な心性による思想が考えられますが、神羅カンパニーの独裁的政治を鑑みるに、これまでの歴史ではこういう妥協を容赦せず突き進んできたとしか考えられない。自然に手を加え環境を改変し、星そのものの生命を削ってまで進歩と発展へ突き進む人類の呵責なき欲求が、ジェノバのもつ破壊願望と接点をもったとき（というよりその願望は人類のなかに潜在的に含まれているわけですが)、そこにセフィロスのための場が生まれ、彼の活動が生まれる。

しかし破壊は一種の救済でもあるわけです。文明が危機的状態にあるときには特にそうです。破壊と救済は表裏一体の関係であり、神はそのどちらの面も持っているわけです。ジェノバが破壊願望の塊であるとしたら、そこに「神」という記号をもちこむセフィロスさんには、やはりジェノバとは違うベクトルを感じます。破壊だけでは生きられず、どこかで救済を望む人間性のベクトルです。わたしはここにほんとうに彼の人間らしさを見るわけですが、ジェノバ（自己増殖する閉じた生命の系）と星（循環しひろがりをもつ開かれた生命の系）のあいだに立ったセフィロスさんが、いったいどんな存在の形を夢想していたか、そして彼が「神」という一語になにを見ていたか、それを考えるだけでわたしは泣きたくなってくるのです。

ずいぶん長くなってしまいましたが、いっそのことここまで来たからなお続けて十字架の話をしてしまうと、セフィロスさんの神願望やそのほかの言動の背景には、いずれにしてもなんらかの先駆的な神というより救世主の存在が想定されてしかるべきなので、FF7 の世界にもおそらくキリストのような神であり人である救世主がいたのでしょう。西方キリスト教の考えではキリストはその死によって人類の罪をあがなったわけですが、FF7 の世界においてもこのような救済論があるとしたら、セフィロスさんがおのれを「神」に位置づけようとすることが途方もない意味を帯びてくることになります。この文脈のなかでおのれを「神」と位置づけるような発想は、ジェノバからはどう間違っても出てこないでしょう。

そしてその救世主は死をもって罪をあがない、あるいは「死をもって死を滅ぼし」という復活祭にうたわれる歌がありますが、そののちに復活して、死すべき定めの人間に対し、罪以前に約束されていた不滅の本来の姿を示すわけです。この世においては、罪と悪とは人間の活動の必然的帰結です。人間の活動は常に破壊と対立をひきつれているわけですが、そうであるならば人間にとって悪とはなんであるか、破壊は悪であるかどうか、人間はほんとうに罪から解放され得るかどうか、救いというものが本当にあるとしたらそれは罪からの解放というものであり得るだろうか、という問いをも、セフィロスさんは投げかけているかもしれないわけです。

十字を切るという行為は、そのような罪まみれの矛盾した人間というものの存在を思い起こさせます。人は苦しみの生から救われることを願うわけですが、その救いは、決して悪の不在を意味するのではなく、悪とともにあらざるを得ない人間のうちに、いつもなぜかほのかに射してくる光であるようにも思うのです。その光の存在を、セフィロスという人はやはり頭の隅において、すべてのことを推し進めているように見えるのです。ジェノバ戦役から何百年もたったのちの世界で、セフィロスという存在の意味が研究されほどかれてゆく過程で、セフィロスという存在に向かって十字が切られるようになる未来まで、存在する可能性があるとわたしは思うのです。

2020/10/31　マスダ@msd_meb2